
ノーモア！ ワンモア？ クリスマス！！

火和良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノーモア！ ワンモア？ クリスマス！！

【Nコード】

N1331J

【作者名】

火和良

【あらすじ】

カネモチの街に雇われたバイトサンタが、
聖夜に反旗をひるがえす！

格差の厳しい「ルシオラの街」。

この街ではもはや、サンタはビジネス。

一夜限りの雇われサンタたちは、サンタの来ないスラムにおもちゃをばらまこうという大作戦を企てる。

ひとり乗り気じゃない三田^{ミタ}は、

「プレミアものは売り飛ばすときに足がつかから大量生産商品で転売価格が高いものがいっていかまあ要するに現金がいちばん」
「さあー！！　こどもたちのためにみんな、がんばろうね！！」

スラム出身のやさぐれ青年ミタと変態熱血仲間たち。

そしてミタが故郷スラムで出会った少女スウは、意外なプレゼントを要求する。

それを聞いたミタは、聖夜限り、少女の「サンタ」として夢を叶えてやると提案するのだった――

騒がしくも切ない、一夜限りの大冒険　開幕！

開幕の章 ヤクザンタの出陣

クリスマス。

この響きにうつとりと、目を輝かせる人種がいる。

ノーモアクリスマス。

この響きを聞くなり、末代まで呪いそうな目をむきだして、壁に頭をうちつける人種がいる。

かくいう俺、名前はトイと言いますが、俺はどちらでもない。俺は、クリスマスの「お客」ではないからである。

俺はホスト側。

そう。 サンタさんだから。

けれど、あまりピュアな目で俺を見ないように。

他の街は違うと思うが、

俺に限らずこの街のサンタというものは

聖夜限りのバイトマンなので。

「イヤッフウウウウウウウウー！！！！」

今年も交通無敵タイム始まるぜえ！！」

「オラオラオラオラそのカップルバイク寄越せバイク！！」

「サンタが通るよー！！ よい子は見ない方がいいよー！！」

いや。

もはや原型ないかもしれん。

*

*

我が格差の街ルシオラは、三層に分かれている。

中心から上層区、下層区、スラム。

イチゴショート・ホールケーキの、イチゴの密集する真ん中あたりが上層区、

端にツンと立ったポイップクリームが下層区、

紙の丸皿がスラムエリアである。土地の高低差も実際、そうなっている。

この街にはサンタがいる。

イヴの夜、金持ちの家の子には高級玩具がどっさり届くし、

「今年のサンタは気に入りましたか？

とてもよかった よい 普通 最低」

「プレゼントは気に入りましたか？

よい 高い 安い 包装が残念」

といった原稿用紙3枚分のアンケートがついてくる。

この街のサンタはとても忙しいので

下層区のこともたちのところへは、あまり来ない。

来れたとしても、ロリポップを3本置いていくくらいだ。

そしてスラムには、サンタは来ない。

スラムと下層区を出入りするには、一日2本しかない列車に乗らねばならず、

しかもその列車は政府の軍人しか乗れず、

さらにサンタが活動するころ、電車は動いていないからである。

「トナカイはどうしたの？」という子どもたちの問いには

「バイクに乗って実家に帰ったんだよ」という模範解答が用意されている。

彼らはひっそりと、普段と変わらぬ一日を終える。

この麗しき聖夜。

上層区にとってはプライドバトル決戦日、

俺の住む下層区にとっては格好の稼ぎ時、

そしてスラムエリアにとっては――

「野郎ども、準備はいいかア!!」

「ウオオオオ!!」

上層区《サンタビジネス株式会社》から10キロ離れた草原にて。

巨大トラックの前に集結した総勢9名のバイトサンタは、

拳を天につきあげ、雄叫びをあげた。

体育会系でもサンタ体型でもない、華奢なインテリ風のトイは、

銀フレームのメガネを押し上げ、不敵な微笑をうかべる。

「これより、『サンタ反抗期計画』を開始する……!!」

「ウオオオオオオオ!!」

さて

今年は、どんな聖夜となるだろうか。

No more! One more? Xmas!!

「サンタ、聞け。 合流場所の説明だ」

ボンボンと、トイはもたれていたダンボールをノックした。
暗がりのなか、床から車輪の轟音と振動が伝わってくる。

三田 遊都^{ゆと} 17歳は、ダンボールの天井を脳天で押し上げ、
閉じかける瞼をこすりながらばやいた。

「……三田^{ミタ}ですよ、トイ先輩」

「おいヤクザンタども聞けーッ!! 祭の説明だア!!」

「ミタ……」

「はあいサンタくん、出てくださーい」

襟をつまみ上げられ、外へ投げ飛ばされるミタの代わりに、
ダンボールには大きなふわふわシロウサギが収まった。

テント布でおおわれた、巨大トラックの荷台。

おなじみのサンタの正装を着たヤクザンタたちは、
めいめいダンボールや大きな袋の隙間に身をひそめている。

額を鉄骨にぶちあて、死んでいるミタに背をむけて、
軍服を着たトイは書類の束をひらつかせた。

「行きは俺と、サンタは列車で、

それ以外の野郎どもはバイクでスラムに潜入する。

バイクもプレゼントだからな、ちゃんと大人に配布するように！
帰りは全員、スラムから下層区に抜ける最終列車で脱出、

集合場所はターミナル西のコーヒー屋だ。

集合時間は夜の8時！ 通行許可証は絶対なくすんじゃないぞ！
何か質問は？」

「ハイ」

いつせいに、16の猛禽類のような瞳が向く。

額をさすり、右手を這い上げたミタは、神妙な顔でつぶやく。

「トナカイには乗っていかないんすか？」

ヤクザンタ達は意外にも、困ったように顔を見合わせる。

トイはミタにひざまずき、優しくぽんと肩をたたいた。

「トナカイはね、バイク乗って実家帰ったんだよ」

「おいテメエら！！ そろそろ駅に着くぞ、準備しろい！！」

「ウーツす！！」

「サンタ、軍服に着替えとけ」

運転手のゴツい掛け声に、ヤクザンタたちは腰をあげる。

あまり乗り気ではなさそうなミタに軍服を渡したトイは、大きなレバーを蹴り上げた。

荷台の一角の布が、ゆっくりと開け放たれる。
射し込む夕陽と、風。流れ去る、広大な原野。
おもちゃがぎっしり積まれた7台のバイクが、ヘッドライトを輝かせていく。

一番出口に近いバイクに乗った青年が、トイとミタに親指を立てた。

「またあとでなー！」

唸りをあげ、色とりどりのバイクが荷台から飛び出していく。
器用に着地したバイクは砂ぼこりをあげ、旋回して、
谷底のスラムゲートのほうへと向かっていった。

レバーを下ろし、トイは肩を回す。

「さてと。残る問題は、お前の潜入だな」

ぐつと軍服を握りしめ、ミタは戸惑いがちにトイを見やった。

「先輩。俺やっぱり、スラムに行くのは……」

「復路便は本日午後8時、

スラムターミナルから下層区行きの最終列車。覚えたな？」

トイは自分の手首のボタンを閉め、襟を正した。
トラックが減速する。

黙りこみ、軍服をひろげたまま固まってしまったミタに背をむけて、
トイはダンボールから小さめのコンテナと、台車を引っ張り出す。

トラックが、止まった。

「終点」

トイはコンテナを開け、中を指し示す。

「復路に乗りたきゃ、着いて来な」

ミタは迷ったように睫毛を震わせ、うつむいている。
しかしやがて心を決めたように、顔をあげた。

「分かりました」

「いい子だ。 例の知り合いに、会えるといいな」

「はい。 ありがとうございます」

軍服を羽織り、ミタは身をかがめてコンテナにもぐり込んだ。

「ついたぞ！ あとは上手くやれ！」

「ありがとうございます！」

『ありがとうございます！』

再び、荷台の幕が開く。

外に見えるのは、人でごったがえすターミナル——聖夜を間近に
ひかえた、

下層区最大の商業区だ。

コンテナの乗った台車を押し、トイは楽しげに歩き出す。

「酔って服汚すなよ」

『汚しませんよ、ガキじゃあるまいし』

すねたようなコンテナからの声に、トイは小さく苦笑した。

「俺もお前も、ガキだって」

その声は

誰に届くことなく、華やかな街の歓声にかき消されたのだった。

t o b e c o n t i n u e d

開幕の章 ヤクザンタの出陣（後書き）

くだらなくて楽しくて切ない話を書きたかったんだ。
クリスマス終わっても続くと思う。

「こいつまだクリスマスやってるww」という楽しみ方もできる！
二度おいしい！ すてき！ ……うん。

HPはこちら <http://aria0007.blog61.fc2.com/>
ついつたはこちら <http://twitter.com/clown07>

第一章 顔芸と冷や汗

スラムに生まれた人間には、ルシオラの住人の証である手首の入れ墨がない。

街の住人に等しく、生まれたときに刻まれるはずの、そのしるしはスラムで生まれ育った人間たちには、決して与えられることはない。

それがない人間は下層、上層区のあらゆる店でリンゴ一つ買えないし、

本来、下層区以上に入ること出来ない。

スラムの人々が、悪環境から抜け出す方法はふたつ。

ルシオラの街を出る。

非合法のルートを通って、下層区に潜入する。

しかし街を出れば、貨幣や言葉が違う。

そして運良くスラムから抜け、下層区に入れたとしても

見つければ投獄か、送り返されるか、

そして舞い戻った同胞に、スラムの仲間がどういう目を向けるかなど――

――ずっと、戻れなかった。

喧嘩別れしたあいつのもとにも、スラムそのものにも。

そうやって時は過ぎ

ミタがスラムを出てから、3年が経とうとしていた。

*

*

夕陽が沈んでいく。

正確には、こっちが沈んでいる。

4人用のコンパートメントの中で
トイはひとり足を組み、優雅にコーヒーをすすっていた。
列車に乗り込んで5分。

谷あい突入した列車はこれから20分ほど、
延々とスラムへの坂を下っていく。

暗い窓など見ても自分の姿が映るだけで、
コーヒーを啜るもつとも美しい角度しか研究できそうにない。

——転売王ミネツサカールトンの名言集、持ってこれば良かった
な。

サンタに似つかわしくない愛用書に思いをはせながら、
トイは今一度コーヒーを口に含んだ。
すると、
コンコン。

「...？」

かすかな ノック音だった。

トイは何気なしに、窓に顔を向ける。

「ご……フツ!？」

窓の外に、

ストッキングに顔を突っ込んだようなミタの顔がぶらさがっている。
盛大に黒い液を噴きだし、

トイは思わず、引きちぎる勢いでカーテンを閉じた。

ゴン！ ギン！！

しつこい自己主張の音に、

「……の、ドアホ……!」

咳き込みながら、トイはそばにあったナプキン紙に文字を書きながら、

窓に押し付ける。

『コンテナに戻れ！　つか貨物庫から出るんじゃないやねえよ!』

ミタは「!？」という顔をしたあと、

だらんと両手をぶらさげ、何かを訴え始める。

今にもミタが落ちそうなこと、顔芸がパワーアップしたこと、

騒ぎが起きてしまうかもしれないという危機感、

笑えばいいのか泣けばいいのか、とりあえずトイは青ざめながらも、
開かない窓に舌打ちしてボディランゲージを読み上げる。

『先輩！　おれ！　くさい！　ところ！　にがて!』

「おれは……？　とても……？　まずい、メシを、食いたい……!？」

おまえまさか、投獄志願……！？」

『おれ！ やねの！ うえで！ いきる！ 平気……！』

「おれ、 そらの、 うえで、 ブラボー、 OK……！？」

『ガンバル……！』

「グッジョブ！？ 待て、待て早まるな……！」

悲壮な顔で、窓にはりつくトイ。

親指を立てたミタは、窓からふっと掻き消えた。

上か、下か。

方向が見えなかった……！

「ミタアアア……ッ……！」

「何をですか？」

涙をうかべつつあったトイははたと、背後からの声に振り返った。

5センチほど開いているコンパートメントの扉から、

生真面目そうな男が直立して覗いている。

年は25ほど、軍服を中肉中背の長身で着こなした青年、であると思う。

5センチ情報によれば。

「何を、ご覧になったので？」

「いえ。 ただの自分の美貌ですよ」

トイはキリツと顔を引き締め、ぞんざいにカーテンを閉めた。

友も元気で留守が良い。 ミタはそうそう死ぬような男ではない。主人公補正という魔術も体得している。こちらの問題解決が先だ。

何か突っ込めばいいものを、生真面目に黙ってしまった青年に、

トイは内心飛び降りたい衝動にかられながら微笑んだ。

「何か御用でしょうか？」

「皆様にお聞きしている事がありまして、是非ご協力頂きたく。
アルド・ノエイル軍曹であります」

スラム行きの列車、しかもコンパートメントに乗れる者は、無条件に軍人。

挨拶の仕方、その常識をひしひしと感じさせる。

トイは物腰柔らかにドアを開け、コンパートメントの椅子をすすめた。

「ご苦労様です。私でよければ」

アルドと名乗った青年は腰掛けるなり早々に、一枚の写真を差し出した。

「この少年を探しています」

受け取ったトイは、微笑んだまま口元をひく、と痙攣させた。
荒廃した建物を背景に、

Vサインを突き出している14歳くらいのこどもが2人、写っている。

一人は青みがかった黒髪に黒眼の、儂げな美少年。

もう一人は

赤みがかった栗色の髪に生意気な目つきの、イタズラ好きそうな少年。

アルドが指さしているのは――

不運にも、数年後には見知った顔になるであろう、栗髪の少年の方だった。

ちらと閉まったカーテンを一瞥し、トイは写真を返した。

「残念ながら。手配書では見ない顔ですね、私的な調査ですか？」
「公私半分ずつ、といったところでしょうか。」

3年前にスラムを出た少年らしく、一応スラムにも、2度ほど捜索に」

「長く探しておいでなんですネ」

「いえ、ほんの最近ではあるのですが、今日中に捕まらなければ、……苦勞が水の泡なので」

「はあ」

誰の、苦勞なのか？

思わず聞きたくなったものの、トイは言葉を飲み込んだ。

これ以上、興味津々に質問するのはおかしい。

彼が探しているのは、他でもない。

——ミタなのだ。

怪しまれるのは、避けたかった。しかし……

トイの無言に、アルドは我にかえったように写真をしまいこみ、頭を下げた。

「ご協力感謝します。それでは、私はこれで」
「アルド軍曹」

立ち上がったアルドに、トイは悠々と腰掛けたまま、声を潜めて囁いた。

「言い切れるほど確証はないのですが。」

もしかしたら、お力になれるかもしれません」

「居場所を……！？」

「その前に、お聞かせ願いたい。なぜ、彼を追っているのですか？」

アルドは不意に、値踏みするような目を向けた。

閉じられた窓、トイの余裕のある微笑、組まれた手。するすると流し見たあと、

アルドは一転して、突き離すように言い放った。

「単なる、スラム脱走犯の搜索ですよ？」

不法侵入者は見つけて投獄……ありきたりの事例でしょう。

何か、特別な事情があるとしても？」

「変わり者なんですよ。私は」

トイは肩をすくめて苦笑した。

アルドの発言に、笑ったように見せかける。

正確には、——背筋の冷や汗に、であるのだが。

この無言の時間が、延々と続くのかという予感が鳥肌を生んだ頃。

『まもなくスラム街ターミナル。スラム街ターミナル。停車時間5分、

すみやかに下車されたし』

淡泊なアナウンスが、沈黙に痛んだ耳朶に流れ込んだ。

アルドは剣呑な目を伏せ、微笑みをみせる。

冷笑気味に感じたのはきつと、思い込みではない。

「残念だ、時間切れですね……失礼。お名前を伺っていませんでした」

「名乗るほどの名も階級もありませんよ、私は」

「そうですか？ まあ、またお会いできましよう。今日の帰りの便にでも。」

その時にもっとじっくり、お話出来れば幸いです……」

冷気だけを残して、アルドはコンパートメントから去っていった。

優雅に微笑んでその背を見送ったトイは、さつと器用に青ざめて呻く。

「ちょっとやばい、ですかねえ……!」

瞬時にカーテンを払いのけ、曇りきつた窓を拭きまくる。
オレンジの灯が流れゆく窓むこうに、あのまぬけ顔はない。

「こついう時に居てほしいなあ、阿呆!」

コンパートメントを飛び出すトイ。
列車は減速している。

手首に、ルシオラの刻印がないミタ。

彼は通行許可証があっても、手首の印がないために、潜入はさらに厳しい。

彼が下層区に来るときに抜けてきたという裏ルートは時間がかかるし、

ゆえにミタをコンテナに入れて、列車で潜入する方法をとった。

スラムに出入りする荷物は必ず検査を受けるが、人の検査よりは簡易的だ。

貨物庫の荷物はおろされた後、軍貯蓄倉庫に入れられる。

そこでミタを回収し、サンタとして街に送り出す予定だったのだが

「なんで外、出歩いてんだよあの子は……! クソザンタ!」

出歩いているならそれでもいい。

問題は、連絡が取れないことだ。もうコンテナに戻ったのか。車内

に潜んだのか。スラムでは電波が通ってないから、電話もテレビもラジオも使えない――
それでも、無性に鳴らしたくなる。

彼に、警鐘を。

列車が、ゆるやかに停車した。

『停車時間は5分、停車時間は5分、すみやかに下車されたし』
「うるせえよ……！」

冷酷に繰り返すアナウンスに舌打ちして、
トイレは貨物庫へと、我慢出来ずに走りだすのだった。

t o b e c o n t i n u e d

第一章 顔芸と冷や汗（後書き）

すごく ねむい しごと たいへん

HP <http://aria0007.blog61.fc2.com/>
ついた <http://twitter.com/clown07>

よんでくれて ありがとう

第二章 故郷へ

街頭の少ないスラムの夜は、本当に暗い。
だからとてもよく見える。

スラムを飛び越えて、上層区と外の世界をつなぐ、幻想的な光の橋が。

俺たちは、その橋の全貌を知らなかった。

満点の星空をつらぬく、銀光の美しさ。

スラムの深い谷底からは、

どんなに首をのばしても、その一部しか拝めなかった憧れの道。
全部を見たかった。

そしてあの綺麗な、底が透けてキラキラしている蒼穹のハイウェイを

「いつか一緒にかつ飛ばそうな！ かつけーバイク盗んで、な！！」

「盗んじゃダメ……買おうよ。役人を」

「え、どういういみ？」

毎晩のように話していたんだ。

何でも手に入る、夢のような場所のこと。

いつか手に入れる、夢のような物のこと。

サンタも大人も助けに来ないと、知っていた俺たちは
自分たちの両手に賭けていた。

まだ こどもだった頃は。

*

*

「居てくれよ……！」

願うようにつぶやきながら、トイはコンテナを開けた。

まだ貨物車両には誰も入ってきていない。外の喧騒が聞こえる。

横暴な軍人の怒鳴り声、抗議の声、泣き声、

聖夜に似つかわしくないものばかりだ。

コンテナの中は——シロウサギのおもちゃがひとつ、残っているだけだった。

一緒に入っていたはずのサンタ袋も一式、なくなっている。

コンテナを蹴飛ばし、トイは貨物車両を飛び出した。

人氣がなくなりつつある客車のコンパートメントを

ひとつひとつ、足早に確認して行く。

いない。

無事に降りたのか？

怪訝そうに見てくる車掌軍人に、あえて毅然と顎を引き、

トイは人でごったがえすホームへ降り立った。

温室の中から冷凍庫に入ったような寒暖差。

のどを刺した冷気に咳き込みながら、視線をめぐらす。

貨物車両の荷物を、例のコンテナを受け取りにいかなければ。

引き取り手のない荷があれば、怪しまれる。

だが、ミタの現状が知りたい。どこにいやがるのかも分からないが、

しかしここで接触するのも——

視線のはしに、ターミナル西のコーヒー屋がひっかかる。

その前に立つて、こちらを見ている男——アルド軍曹だ。

「やな野郎だ……」

あからさまに歪む口を咳でおさえこみ、

トイは気づかぬふりをして、貨物車両の受け渡し場所に足を向ける。アルド軍曹は人波をすすると縫うように、その背を追った。

列車最後尾のホーム、より一層、人の頭が隙間なくうごめく方へ進みながら、

トイは曇るメガネのブリッジを押し上げる。

荷を降ろし終えた列車が、大きく蒸気を噴き出す。これから復路の8時まで、

この列車は一度車庫に入る。

今から、3時間後。俺たちはこの列車に、無事に乗りこめるのだろうか。

ひとりとして、欠けることなく……？

重々しい車輪が、ゆっくりと廻り始めた。

*

*

谷あいを這い上がっていく鉄橋。

錆び付き、今にも崩れてそうなこの橋を、3年前もこうして見上げ

た。

見納めと信じて、目に焼き付けた。

鉄橋のはるか上にある「光の橋」はとても優雅で、星々がきれいで、廃墟と文明のコントラストが怖いほど美しかったことを、今でも覚えてる。

「壊れそうで、壊れないものなんだな……？」

どろだらけの軍服を脱ぎ捨て、ミタはサンタの袋にそれをおしこんだ。

線路の下に身をかかめて、私服に着替え終わったミタは、馴染みの靴のひもをしっかりと結んだ。

黒いコート、黒のタートルネック。黒のズボン、黒の革手袋、黒のブーツ。

どれも、3年前にスラムを出た時と似たデザインのものだった。

頬をこすると、ぬるっとした液の感触があった。

他にも背中と腕とヒザの打ち身と、さつきから少々呼吸がづらい。

走る列車から落ちてこの程度なら安いものだと思うが、元値が痛い。

「トイ先輩、ウサギの手紙に気づいたかな。

いや、そんな繊細な人じゃないかも…

……気づかなさそー……」

3段活用風に、淡白にあきらめ、ミタは袋を背負いあげた。

「貨物庫に毒まくか、普通……。密航対策でも、人が、わるいね…

……」

ふらふらと鉄橋の下をぬけ、コンクリートの砂利道を踏みしめてい

く。

道の先には、満点の星空のもとに息づく、荒廃した、人気も灯もないビル街。
かつての故郷がある。

ミタは大きく、白い息をつき、しっかりと口元を引き締めた。
腰のベルトから、ひび割れてしまった懐中時計を引き出す。

午後5時30分。あと2時間半。ミタは眉根をよせて、駆け出した。

かつての住み家まではまだ、1時間はかかる。
駅より随分、手前で落ちてしまったせいだ。

「ギリギリだな…！ トナカイはいらっしゃいませんか…！」

誰もいない街に、苦笑めいたミタの言葉が響いた。

トナカイは、バイク乗って実家帰ったんだよ。
この街に、サンタは来ないんだよ。

——君の親は、君を迎えに来ないんだよ。

蹴り上げる街の破片が、乾いた街にこだまする。

「知ってるよ……！！」

いつそう荒々しく、ミタは廃墟の街を駆け抜けた。
おもちゃのいっぴいだった、夢の袋を背に、跳ねさせながら。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第二章 故郷へ（後書き）

クリスマス終わったのにwwクリスマスww
って、いじめないでください。

よんでくれて本当にありがとう。

HPはここ <http://aria0007.blog61.fc2.com/>

ついった [http://twitter.com/clown0](http://twitter.com/clown07)

7

第三章 聖夜の出会い

三日月が、くずれたコンクリートの壁にひっかかって、なかなか落ちてこない。

かじかむ両手をにぎりあわせ、

少女はつめたい床に投げ出した太股を、抱き込んだ。

少女がいるのは、壊れかけたビルの2階である。

広いフロアの窓側には、整頓された本棚、スーツがくるまれた寝袋など、

男が住んでいるような跡がある。

そこと随分はなれた一角には、すすけたぬいぐるみや星形の写真立て、白い毛布が置かれた少女の居住エリアがあった。

廃墟のような街からは、ときおり徘徊する軍人の靴音が聞こえてくる。

規則的で、機械的。耳障りな秒針のような音だった。

「おそい……」

膝に顔をうずめて、少女は泣きそうな声で呻いた。

さむそうに毛布にくるまり、ごしごしと、眠気と涙で赤くなった目をこする。

少女は立ち上がった。

フロアの端から端へ。男の部屋めいたエリアへと歩いていく。たたまれた寝袋をじっと見つめていた少女は、大きくひとつ、身震

いた。

「おい！ 何をしてる！！」

少女ははっと、顔を上げる。

ガラスの砕けたベランダから、罵声が聞こえる。

毛布を投げ捨て、ベランダに飛び出した少女は、はだしのつま先をたてて下をのぞき込んだ。

銃声ひとつ。

大柄な軍人が、このビルの玄関口に向けて発砲した。

体をゆすつて、軍人はビルの中に駆け込んで行く。

くぐもった、荒々しい靴音がふたつ、ビルの中に反響する。少女は青ざめた。

フロアに駆け上がってきた細身の青年——フードを目深にかぶり、大きな袋を背負った青年は、銃声に大きくつんのめった。

「うわ…ッ、と……！！」

舌打ちしながら、青年は焦ったように、フロアを見回す。

すんでのところでベランダの影に飛び込んだ少女は息を殺し、割れた壁穴から中を覗き込む。

青年は袋をかなぐり捨て、悔やむように叫んだ。

「いないのかよ、タカセ……！！」

タカセ。

その言葉に少女は、目を見開いた。

フロアに軍人が突っ込んでくる。銃を突きつける軍人に、青年はうんざりと首をふった。

「大人しくしろ！ 何を持ってる！！」

「しつこい、麻薬でも武器でも泥棒でもありませんよ！

こんなわかりやすい泥棒いますか！？ どうみてもサンタでしょ！」

——マフィアかとおもった。

少女は食い入るように見つめながら内心つぶやいた。

銃など気にもとめず、青年はズカズカと軍人につめよる。

一歩引いた軍人に、青年は傷もアザもない右の手首を見せて畳みかけた。

「ほら。印がないでしょう、俺はスラムの住人です。

おもちゃを売った売人のリストはこれ、

こどもに渡すプレゼントですよ？ 仕入れも商品もピュアであるべきです」

突き出した紙を疑り深くむしりとった軍人は、リストに小粒の目を近づける。

その太い喉もとを、黒革の手が紙ごと鷲掴んだ。

「それが、理想なんすけどね……」

軍人の頭が、床に叩きつけられる。骨の激突する酷い音がした。

青年はゆらりと身を起こすと、首を回して息をつく。

昏倒した軍人の銃を抜き、サンタの袋に放り込んだ。

「……まずいな。すごくサンタらしくないな」

どかっとなんか軍人のでぶ腹に腰をおろし、青年はうなだれた。
10秒後。

青年はケロリと立ち上がる。

「まあいいや」

（立ち直りはやい人だな……）

少女は恐る恐る、壁の影から顔をのぞかせた。

青年はこちらに背を向け、男の居住スペースの前で腕を組んでいる。

少女はえいとばかりに、フロアに足を踏み入れた。

「あの！ すみません」

「うん、お邪魔してるよ」

青年は平然と振り返る。逆に少女はびくついた。

青年は袋を担ぎ上げ、後ずさる少女のまえに袋の口をひろげた。

一番上には、硝煙の香る銃が乗っている。

「よい子の少女よ、何でも好きなものをおとりなさい」

「い、いらない……」

「なんで。サンタからの贈り物だよ」

「い、いいよ。うそ付かなくても……だって、この街にサンタこないもん……」

怯えながらも、少女は真っ直ぐに、サンタと名乗る青年を見上げた。

青年は眉をあげる。

「おもちゃをくれる人はもう信じちゃいけないよって、タカセが言ってた」

「タカセ？」

青年は、袋を取り落とした。中のおもちゃが床に散らばる。

少女は警戒しつつ、うなずいた。

「わたしをひろってくれた人。1年前にわたし、スラムに捨てられたから」

「タカセ、まだここに住んでる？」

少女は、両手をきつく組んで、うつむいた。

青年は膝をつき、目線の高さをあわせて言葉をまっっている。

少女は涙をためた顔をそむけ、謝るようにつぶやいた。

「ケンカして、2週間くらい、かえってこない」

「……なんだ、そうか。じゃあスラムの留置場にいると思うよ、心配ない。」

あと3日もすれば帰ってくる」

青年は人懐っこく笑って、少女の頭を撫でた。

驚き、聞き返そうとした少女を遮り、青年は男の——タカセの居住エリアへ歩いていく。

「そういう意地悪は絶対しないから。なんかヘマでもしたんだろ」

「どうして分かるの？ お兄ちゃん、タカセのともだちなの……？」

青年は本棚から適当に本をとり、適当にひろいあげたペンで、表紙に文字を書きつけている。

肩越しに振り向き、青年はどこか寂しそうに笑った。

「友達だった」

本を定位置に押し込む。

大きく伸びをしながら戻ってきた青年は、少女の顔を笑ってのぞき

込んだ。

「さて。君の心配事も消えたところで、なんか言ってみな」

「なんかって……何？」

「欲しいもの、おもちゃとか食べ物とか。大人が子供の夢を叶える、

クリスマスってのは何処でも、そういうものだ」

「い、いいの。ほんとにほんとにいらない。……だって、」

「だって？」

怪訝そうに首をかしげる青年に、少女は力なく笑い返した。

「欲しいもの、売ってない」

青年は、いきなり吹き出した。

かがめた身をさらに曲げ、腹を抱えた青年に、少女は面食らったように口をぱくつかせた。

ひいひい笑いながら、青年は目尻の涙をこする。

「母親が欲しいんだろ！」

「な……ッ！？ ほ、欲しくない！」

「いーや、その言い方は凶星だ。分かるよ、おかあさん欲しいよな！」

「い、いらない！ あんな、ひどい人、大ッ嫌い……！！」

真っ赤な頬をふくらませ、涙をためて睨む少女に、

青年はようやく息をととのえ、微笑した。

左の袖をまくり、腕時計でもみせるように手首を差し出す。

その手首には、円形の刺青が入っていた。

しかし訂正線のような古傷や、

やけどの跡が幾重にも、その印をかき消している。

少女は驚かなかった。

ずっと、古傷に食い込む視線を避けるように袖をおろした青年を、少女は見上げる。

彼はなつかしむように、笑った。

「俺は、欲しかったけどね。

捨てられて、一年目くらいの頃なんか特に」

少女は目を瞬かせ——やがて困ったように、伏し目がちに微笑んだ。

笑っているような、泣いているような声をこぼしながら、濡れた頬をぬぐう。

「おかしい。 サンタの親なのに、ひどいんだね」

「笑うとこじやないでしょ。 君のツボおかしいよ」

「おかしくないよ、お兄ちゃんがおかしいんだよ、

サンタなのに、マフィアみたいだし」

「マフィア…?!」

『おまえの首、そこに落ちてたよ』と言われたような驚きっぷりに、少女はお腹を抱えて笑いながら、涙をこぼした。

ひとしきり笑ったあと、少女は鼻をすすってもう一度、涙を拭く。

そしてやはり泣きそうな笑顔で、言った。

「あいたいよ」

「……そっか」

「ほんとうに、会わせて、くれるの?」

「上の街の、どこに住んでた?」

「ウ、うう……」

少女は驚いて、青年は緩慢に、のびていたはずの軍人を振り返った。もぞ、と、巨体の腕がうごいている。

あらータイヘン、と、どうでもよさそうに頭をかいた青年のコートを、

向き直った少女は、凜と引っぱった。

「ねえ。 やっぱりプレゼントもらっていい？」

「え？ ああ、いいけ、ど……！？」

軍人の足元にあるサンタ袋へ駆け出す少女に、青年は啞然と手を伸ばす。

軍人の上半身がむっくりと起き上がる。

「ちょ……と待った、 あぶな……！」

床を蹴る青年。

軍人の瞳孔を剥いた目が、華奢な少女へ向いている。

少女は白いワンピースを翻し、サンタ袋を―――通り越した。

伸ばされた太い手をすり抜け、駆けながら少女が拾い上げたのは、軍人から取り上げた黒い拳銃だった。

「こつちなの！」

少女は青年に叫び、ベランダに疾走する。

青年は真っ青になりながら、

今度はこつちに向かってくる軍人に備え身を沈めた。

「……ったく、なんて教育を、タカセの、クソ、野郎がッ……！」

八つ当たり。

回し蹴りを太い首に叩き込み、倒れ込んだ巨体を踏みつけ、青年はベランダに走る。少女は塀に器用に乗りあげ、あらわにした太もものベルトに拳銃をさしこんだ。さっきの儚さどこへやら、スカートの隠しもせずに、少女は両手をひろげた。

「サンタさん、だっこ！」

「股をとじなさい、女の子でしょ！」

「わたし、スウ！」

やっと少女、スウは、晴れやかに微笑んだ。

「サンタさん、お名前は？」

青年は少女を抱き込み、塀を飛び越える。

少女の綺麗な黒髪が、落ちかけた三日月に絡んで、すり抜ける。

そんな映像が、青年の目に焼きついた。

道路に着地し、受身をとって転がった青年は、スウのワンピースの砂をはらって、呆れたように歯をみせる。

「サンタなんですよ。 本当だね」

本名は、ミタユウト。

ミタとスウの聖夜の冒険は、こうして幕を開けたのだった。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

第三章 聖夜の出会い（後書き）

年内に書き上げたい…！

5章くらいの予定だったのに、いま分けたら13章くらい行きそうな分量だった。ナンテコトダ！＼（＾o＾）／

うおおお！

火和良のねこ缶はここ <http://aria0007.blog61.fc2.com/>
ついったでエブリデイ <http://twitter.com/clown07>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1331j/>

ノーモア！ ワンモア？ クリスマス！！

2010年10月8日12時10分発行